令和4年8月豪雨災害における継続支援

―自立と繋がりを重視した高齢者サロン―

NPO法人　災害看護研究所

はじめに

令和４年８月豪雨災害の被災地であるＡ地区は, 集落の1/3の家屋が床上床下浸水の被害を受け, 孤立地域となった.　被災地の高齢者は, 災害時による影響と被災体験の有無による人間関係において心身のストレスを感じていた. また、災害発生前より開催されていた高齢者サロンでの交流が困難な状況にあった. 今回Ａ地区の高齢者サロンにおいて自立と繋がりを重視した継続的支援を実践した結果, コミュニティで支え合い, 今後の心身の安定に繋がる効果的な交流の場となったためここに報告する.

活動目標

１．被災後のストレスに関連した健康障害を予防することができる.
２．住民や支援者の交流により, 生活上の不安や問題について思いを語り合える.
３．生活再建上の問題に対し, 行政や他職種の支援組織と協働し継続支援に繋げられる.

活動内容

当法人では,公益財団法人日本財団の助成を受けて、A地区での高齢者サロン支援を2022年11月11日から2023年3月17日の期間に4回実践した.筆者は企画者として参画し,1回目は災害発生から3ヶ月後の11月,2回目は12月,3回目は1月,4回目は3月の開催とした.　開催前には区長,社会福祉協議会,サロン担当者と打ち合わせを重ねた.

健康チェック,アロマハンドマッサージ,歓談の場作りを共通内容とし,他に自ら作成出来る季節に合わせた内容を企画し参加者13名と交流を図った.

倫理的配慮

実践報告の趣旨をＡ地区社会福祉協議会, 区長, サロン参加者に目的を説明し同意を得て学会誌等への発表に関する承諾を得た. また自由意思を尊重し辞退しても不利益にはならないことを保証しデータ公表の際には, 個人名や施設名が特定されないように配慮を行った.　明記すべき利益相反はない.

１１月　新聞でスリッパ作り

１１月　アロマキャンドル作り

１２月　ロールケーキ作り

１２月　クリスマスリース作り

１月　コースターと豚汁作り

３月　ハーバリウム作り

結果

１．＜健康状態＞
１回目（１１月）では,血圧測定時に「最近測ってなかった」等と述べていた.
２回目（１２月）では「こういう機会がないと家から出ない」等,コミュニティについて述べていた.
３回目（１月）では「最近手がしびれる」等の体調の変化を傾聴した.
４回目（３月）では,13人中8人が高血圧であり「薬もらいに行くのも大変」等といった通院の困難さがあった.
この結果を保健師に報告し経過観察を依頼した.保健師も個々に声をかけていた.
２．＜生活上の不安＞
買い物に関し「移動販売車が来なくなった.」等の買い物の不便さを述べていた.
３．＜生活再建上の問題＞
３回目では,スタッフに住民が収穫物の調理方法を 教授する一方で「まだ数年は田植えができない.耕し機が流された」等の農作業の不安について述べていた.

考察

健康チェックでは. 後片付けに追われ自身の健康を考えるゆとりがなかったことが伺えた. また, 交通網の被害や居住環境の被災後の変化では, 家族への遠慮も加わり通院や治療継続の障壁となっていたことが明らかになった.　これらのことより健康障害を促進する要因が明らかになった. この健康問題に対して, 支援者が介入することで, 自らの健康問題を顧慮する機会になったと考えられる. しかし, 今後の生活再建でのストレスで, 新たな疾病が懸念され, 引き続きの経過観察が望まれた. その為, 保健師と協働できたことは, 今後の住民の健康管理に繋げられる継続支援に繋がった. そしてサロン参加者が, 交流する中での思いの表出や, 支援者に近況を報告すること心の安定の一助につながったと考察される.

課題として, 高齢化に伴う生活再建への不安や, 生活再建の労力の負担等の課題を把握すること, 及び健康管理やコミュニティで支えあえる環境を継続して整えていくことがあげられる.

おわりに

高齢者サロン支援は、4回で終了とした。回数を重ねるごとに、支援者とサロン参加者の関係が深まる一方で、サロン参加者同士のコミュニティも回復していった. 本来の姿に回復する自立という視点で、終了する見極めも重要と考える。地元の医療福祉関係者に引き継ぎ、今後はイベントがある時等に訪問するなどの見守りを継続していきたいと考える.